

「新たな国土・広域計画研究会」第1回議事録

日時：令和3年12月8日（水）19：00～20：43

場所：WEB 会議方式

○各出席者からのコメント。

- ・地域生活圏の設定のための広域連携に関する研究素案について説明した後で意見交換を行いたい。
- ・過去の地域間のつながりといえば合併時に紛糾した話を記憶している。最近のデジタル化・自動運転を含めてどう動いているのか興味がある。若い人が地方をどう捉えているのか実態を把握する必要がある。
- ・10万人の圏域がどのような構成になるのか把握していくことが重要と思う。10万人となると連携無しで単体でも存在出来る箇所もあると思う。オンラインでどのようなことが代替出来るのか興味がある。
- ・民間のデータは一定の基準が示せると活用出来るかと思う。
- ・地域生活圏10万人のくくりとはどのような機能を担うのか決めてかからないと訳の判らない話になる。何を賄うための10万人の圏域なのか議論が必要である。
- ・市町村を割らないといけない議論があるが実際は難しいと思う。以前転出入の分析をしたことがあるが10万人を分割するのは難しいと思った。
- ・クリスタラーの中心地理論・石川栄耀の生活圏構想に関心を持っていた。50年前の理論をそのまま活用するのではなく現代に適合した圏域論の議論が必要である。
- ・広域連携の論説に見られる「埋め込み」（公式・非公式の結びつき）の概念が気になっており数学だけでは解けない結びつきの部分に関心がある。
- ・10万人の地域生活圏をどのように捉えるのか。定住自立圏、連携中枢都市圏の中に地域生活圏が重層的につくられるのか良くわからない。デジタル化によって地方都市に地域生活圏が形成される時の実態がつかめるとよいと思う。
- ・流域圏という単位でのプランニングが防災対策を考える上で重要ではないか。圏域について考えたときに流域の議論も加えられないかと思う。
- ・デジタル化が離島での生活に影響を与えるのかといった離島を含めた圏域に関心がある。
- ・若者が暮らしたくなる圏域の検討では実際に学生を入れたディスカッションを行っても良いと思う。

- ・市町村合併では財政状況による不自然なつながりがあった。そういった人為的なノイズを除いたらどのような圏域になるのか当時の合併の議論見ていくと多少判ると思う。
- ・市町村の組み合わせはその背景として以前密漁国同士だったという非公式の部分に国の政策が重なったものもある。
- ・デジタル化が遠隔医療にどれぐらい影響を与えているのか判らない。実態をつかめると地域生活圏の可能性を議論出来ると思う。
- ・既存の公開されている民間のデータは市町村単位では公表されていないことが多い。
- ・距離的に離れていても自動運転などでカバーできるサービスもある。デジタル化と人口減少を前提とした議論が必要である。
- ・サービスといったナショナルミニマムをどうするかといった守りの姿勢もあると思うが、一方で攻めの連携視線も大事ではないかと思う。
- ・新潟・群馬・長野にまたがる雪国観光圏がある。客を呼ぶため地域イメージを高めるブランディングを進めている連携もある。

「新たな国土・広域計画研究会」第2回議事録

日時：令和4年1月19日（水）19：00～20：20

場所：WEB 会議方式

- ・今年度は研究会の形式としつつ皆の知見を機関誌「人と国土21」に分担執筆する形で進めたい。どのような内容で書いていただけるか事前に案を出してもらったところおおむね地域生活圏、圏域に関する希望をお寄せいただいた。
- ・国土審議会計画部会での議論が当面、地域生活圏の議論になると聞いている。ただなんのための地域生活圏なのか不明である。
- ・以前スタバインデックスなる発想の調査を行っていて30万人など数字をつくる時のベースとしたり、人口が足りないところは技術革新・テクノロジーの進歩により補えるのかなどの検証をしていた。
- ・圏域に関する変遷について扱いたい。以前は圏域を割る思想があったと思うが、今はくっつきたい所がくっつくといった自発的な圏域形成となっているのではないか。合併時の歪んだかく乱要因を掘り下げること考えている。

- ネット通販によって商業・供給サービスによる圏域の繋がりがなくてもいいものがあるのかなのか大都市と小都市で見えると面白い。ただ総務省の家計消費状況調査をみたところ小都市ほど利用が多いと思っていたがそうでもなかった。
- 定住自立圏、連携中枢都市圏のビジョンをみて現在の市町村間の広域連携の背景を分析したい。
- 流域圏の議論の時に 230 位の圏域数とされていて江戸時代の藩の数とほぼ同じであった。今年の「人と国土 21」にてデジタル生活圏においても同様の数であるとの執筆（アクセンチュア中村彰二朗氏）を見た。交通量の整備により圏域は広がってはいるが 200～300 のところに圏域のまとまりがあるのではと考えている。
- 地域経済にとって観光が期待されている。
- コロナで観光地がダメージを受けているが既に回復した地域もありその背景に何があるのか見ていきたい。
- 具体的には V-RESAS のデータを使用して都道府県単位よりは小さいレベルでコロナ前とコロナ後の差異を見ていき要因を分析したい。
- 産業面から地域生活圏の在り方、具体像について検討したい。
- 人口 10 万人規模の小規模の圏域において 2 つの機能について調べたい。一つは新しい産業が起きて就労する場が重要であることから現状の産業について把握。もう一つは行政の中核管理機能（裁判所、労基署、職安など）。末端のところ既に集積しているところがあると思うので調べてみたい。
- 公共施設再編の研究を行っている。人口が減少すると複数の自治体で公共施設による公共サービスを提供することになる。今後連携して市街地に大きな複合公共施設を整備していくことが考えられる。
- 図書館に注目しており別途実施しているアンケート調査で利用状況を聞いており遠くにある図書館を利用しているのか、電子図書館サービスなどの実態をつかみたい。
- 合併はガバナンスといった行政効率化のためには意味があるが、国土政策上、定住圏の議論はなんのためだったのかよくわからない。
- 四全総では定住圏を継承し計画を推進するための議論をしていた。高次の機能を持ち発展していく核となるものであったと思う。
- 今の国土審の議論では、日常生活を続けるうえで必要な広さはデジタル化を含めて最低限どれぐらいの枠組みでよいのか議論していると思う。
- 広域地方計画の役割は県をまたがる複数プロジェクトを国が考えることを想定している。ただ新幹線の整備など国土政策で決められないもの

もある。

- ・コロナ後の観光政策は、テレビ、インスタによることなく自分なりの価値観を身に着け地域の魅力に気付ける観光客を誘致することが必要。観光客を選ぶ時代になってきている。
- ・関係人口による交流といった一つの地域に継続的にかかわることは近隣県のなかで緩い形の圏域になると思う。

「新たな国土・広域計画研究会」第3回議事録

日時：令和4年3月18日（金）19：00～21：00

場所：WEB 会議方式

- ・「人と国土21」に研究成果報告を掲載するにあたり、全体をラップアップする原稿を書くため、本日は地域生活圏について皆様のお考えをごく簡単にご説明いただき、場合によっては後日個別にお伺いすることにしたいと思う。
- ・まず私自身は、自治体にある図書館の利用状況を多面的に捉えたいと考えている。調査対象は電子図書館、広域連携が多い兵庫県西部・中央部としたい。可能であればコロナの影響も調べてみたい。別途、科学研究費でアンケートを実施しており一部データを出しながら紹介したい。
- ・市町村間の広域連携の枠組みの形成要因を考えたい。交通網による通勤圏などが圏域設定の中心となる中でも、別の歴史的背景が影響しているのではないかと考えている。
- ・今の連携中枢都市圏・定住自立圏の圏域と、江戸時代の藩域、過去の国土・地域政策圏域、市町村合併の地域を重ね合わせて、具体的に地域を取り上げながら変化の様子を見ていきたい。
- ・「観光地圏域のレジリエンス」をテーマとしたい。
- ・Vリーサスの宿泊数からデータベースを作成し、コロナ前後で客の増えたところ減ったところを見ていく。観光は感染症に大きく影響を受けるが、安定した集客の条件を考えてみたい。
- ・産業面から地域生活圏の在り方、具体像について検討したい。現在、人口10万人位の圏域が検討されているが、経済雇用がどれぐらい成り立つのか考えてみたい。
- ・現状10万人から30万人の圏域で成り立つ産業の実態を把握し、もしく

- は地域ごとに管轄が分割された行政の中核管理機能（出先機関等）がどれくらいあるのか都市雇用圏をベースに調べたい。
- 2年ぐらい前の国土の長期展望専門委員会（第5回）に出された資料では労働者の供給量、需要量がデジタル化によって一定程度解消されることを示した。
 - 供給側の観点から、例えば30万人の圏域内で提供できる医者的人数など供給量のチェックが必要であると思う。
 - Eコマース（電子商取引）の時代には物流があれば世界中の物が手に入る。フィジカルの圏域がデジタルの進展によって意味をなさなくなるのではないかについて書くことを考えたい。
 - 全国総合開発計画以来の国土計画における圏域論の歴史について執筆したい。関連して実施されてきた関係省庁の圏域施策についても扱いたい。
 - モデル定住圏や流域圏をモデルとした地域の事例はあるのか。
 - 圏域を作る議論の時に、哲学としての流域圏みたいな話と、モデル定住圏みたいな補助金の受け皿のようなものがある。同じ土壌で扱うのは難しい。
 - 市町村合併時に、圏域を形成する理念の裏では、合併の相手側に借金があるなどドロドロの財政シミュレーションの考え方があつた。
 - Vリーサスの宿泊数のデータは、もともになっているデータはなにか。市町村別は無いと聞いている。
 - 日本観光振興協会が自治体から上がっている資料を提供している。観光庁がテコ入れしてかなり怪しいデータ（観光入れ込み客）もあるが、宿泊数はある程度信頼出来る。市町村別はまとまった数字を出したがない。
 - 奄美で宿泊を提供しているのは3か所程度でこれをある程度引き延ばしをしている。こまかいデータは必ずしも正確ではないと言われている。
 - 定住圏と流域圏の重なりとして、弘前が重なっていると資料でみたことがある。長崎の定住圏は佐世保の地域が指定されていて、北部の拠点形成しようとする考えが当時あつたと思う。
 - 5全総の多自然居住地域について当時のことを知りたい。
 - 小田切先生が講師のころにスタートした話で、小さな拠点の施策や、関係人口の考え方につながっている。今のデジタル田園都市にもあるが疎なところでもデジタルを使えば暮らしていけるという考え方もある。
 - 平成16年の2層の広域圏が現在どうなっているのか知りたい。
 - 大きいほうは現在の広域地方計画制度に結びついている。小さいほうは

昔からの広域市町村圏、そのあとは定住自立圏、連携中枢都市圏になっていった。

- 圏域の設定の仕方について、モデル的に幾つかを束ねるのか、それとも全部をおおう発想で行うのか、背景について知りたい。
- 昔は国土を切り分けて圏域を形成する考えがあった。その後徐々に切り分けるよりは、力のあるところにくっ付いていく、くっ付きたいところはくっ付くといった流れになる。
- 二層の広域圏に入らないところ、二層目の30万人圏に入らないところは、面倒を見る力のあるところとくっ付けて、それでも残ってしまうところはハンディキャップ地域として指定する議論あったが、豪雪や離島の考え方も変える必要があるので実現しなかった。
- 圏域論の議論では全国で200～300くらいという数字と150前後の数字が良く見受けられる。昔の藩もおよそ300くらいであり、広域的なつながりの中で二つを一つにまとめたりしたりしているのかもしれないが、圏域論を考えていくと結局だいたいその程度の数に落ち着くということではないか。

以上